

追悼 飯野三郎名誉教授



飯野三郎先生遺影

略 歴

- 明治41年2月 富山県に生る
- 昭和3年3月 第四高等学校理科乙類卒
- 昭和3年4月 東京帝国大学医学部医学科に入学
- 昭和7年3月 医学科卒業
- 昭和7年4月 東京帝国大学医学部整形外科教室に入局、副手を嘱託され、高木憲次教授に師事
- 昭和10年4月 東京帝国大学助手
- 昭和12年6月 東京帝国大学附属病院外来診療所医長
- 昭和17年4月 東京通信病院整形外科医長
- 昭和24年5月 東北大学教授
- 昭和36年7月 東北大学医学部附属病院長に併任（任期2年）
- 昭和46年3月 退官
- 昭和46年4月 東北大学名誉教授の称号を授与される
- 昭和46年5月 東京女子医大客員教授
- 昭和48年3月 定年により退職

飯野三郎先生を悼む 今 田 拓

東北大学名誉教授飯野三郎先生は1978年10月26日、肝性昏睡のまま永眠された。享年70歳、まだまだ後進を指導して頂かなくてはならない年齢であった。

先生はわが国の整形外科学会発展の経緯に多くの研究業績を残されたが、その領域は広く、リハ医学に関するものも少なくない。

先生は機械に詳しく、関節拘縮治療器、先天股脱装具ばかりでなく、麻痺患児用電気自動車まで設計された。この設計は25年も昔のことであるが、片手だけで安全に操作ができ、障害物に接触した場合直ちにブレーキが働く等、いまの電動車いす以上の性能を有していた。もっともこのような機械は先生の余技で、その中心は何といっても歩行解析機械の開発であったと思われる。

先生が一貫して取り組まれた歩行分析の数々は、わが国のリハ基礎学の発展に輝かしい歴史を残した。歩行分析は今やリハ医学会の花形であるが、先生が歩行の研究をはじめられた頃は、今のような電子機器もなく、先生自らの手作り機械であった。

歩行中の人間身体定点の軌跡を立体的に、さらに時間の次元を入れて、同時に記録する方法が飯野式パソグラムである。立体の軌跡を三次元に分けて記録するために、円柱レンズをカメラの前に取り取けたその発想は、コロンブスの卵と評価されている。そして人間の歩行におけるダイナミックな重心の動きを把えるという最終目的に向かって、多面的な追求が重ねられた。先生の最終講義の題は「歩行研究序説」、御退官の時が序説で、「歩行分析は日暮れて道遠し」とその中で述べられている。

先生は日本リハ医学会創立時からの評議員、御退官まで学会の発展に力を尽されたが、学会創立後間もなく出版された「リハビリテーション医学の実践」は、先生の編集になるもので、当時数少ないわが国のリハ医学成書の中にあって、異彩を放った大作であった。全国の大学にさがかけて杉山教授と手を組んで東北大にリハ医学の研究講座を作る努力をされたのも先生であった。そして一方では、肢体不自由児対策における施設計画や、地域予防活動にも早くから手をつけられ、その業績は昭和45年度保健文化賞に輝いた。

先生の教えを受けたリハ医としての立場から残念でならないのは、先生は心理的に障害の受容がよすぎたということである。お若い頃から心臓が悪く（organic に氣にされる必要はなかったはずであるが）、退官後は鎌倉に引っ込んでしまわれた。用がなくなった者を引っ張り出さないで欲しい、という余りにも恬淡たる御心境は、病氣に対しても諦めが早かった。

日本のリハ医学が先生を失った損失の大きさを考えると、先生に心理的受容の暇をあたえず、その identity を分けて頂くことに徹するべきではなかったかと心残りである。御冥福を祈って止まない。（宮城県拓杏園長）